

## 令和3年度岩手県小・中学校学習定着度状況調査結果の概要について

### 今年度の成果○と課題△

【教科調査】R3年度より作題の方針を変更し、問題数を20問とした。

- 中2国語の平均正答率の上昇。(R1との比較)
- △ 小5国語、中2数学の記述問題における「無解答率」について、R1年度との比較から、今年度も課題が見られる。(表1・2)
- △ 正答数5問以下の児童の割合が増加傾向にある。特に数学の割合が高い。  
 小5 国語 11.3% (R1 3.0%)、算数 13.3% (R1 7.7%) 国語、算数ともに増加。  
 中2 国語 3.3% (R1 3.1%)、数学 34.9% (R1 16.9%) 数学で増加。

### 【学校質問紙調査】

- 注視する5項目のうち「質問8(間違いを認める雰囲気作り)」については、小・中学校ともに積極肯定の割合が高い。
- △ 注視する5項目のうち「質問12(書く指導)・16(発展的な家庭学習)・27(つまづき対応した授業)」については、小・中学校ともに積極肯定の割合が低い。
- △ 県学調の問題を活用した組織的な取組「質問21(全教員で問題を解く)」についての積極肯定は、年々低下している。

### 【児童生徒質問紙調査】

- 第1期アクションプランに掲げる指標について2つの項目で昨年度の実績値を上回った。
- △ わかる授業の割合が低下。家庭学習は2時間以上の割合が低下。

## I 調査結果の概要

### 1 調査の目的

各小・中・義務教育学校において児童生徒一人ひとりの学習の定着状況を把握し、その分析結果を生かした授業改善をより一層推進し、一人ひとりを伸ばす指導の充実を図る。

また、学習の定着状況を把握するとともに、明らかになった学習指導上の問題点を、各種研修会や学校訪問指導等の様々な教育施策に反映させることにより、本県すべての教員の指導力向上に資する。

### 2 調査の内容

| 調査種類              | 実施日                       | 調査対象                 | 対象数・校  |
|-------------------|---------------------------|----------------------|--------|
| 教科調査<br>児童生徒質問紙調査 | 令和3年10月6日(水)              | 公立小学校第5学年・義務教育学校第5学年 | 9,531人 |
|                   |                           | 公立中学校第2学年・義務教育学校第8学年 | 9,883人 |
| 学校質問紙調査           | 令和3年9月29日(水)<br>～10月6日(水) | 公立小学校及び義務教育学校        | 296校   |
|                   |                           | 公立中学校及び義務教育学校        | 150校   |

### 3 教科等の実施状況

| 実施学年(実施校数)    | 国語     | 算数・数学  | 児童生徒質問紙 | 学校質問紙 |
|---------------|--------|--------|---------|-------|
| 小学校第5学年(291校) | 9,152人 | 9,150人 | 9,157人  | 296校  |
| 中学校第2学年(150校) | 9,225人 | 9,183人 | 9,193人  | 150校  |

### 4 前回との変更点

- ・教科調査の作題の方針を変更し問題数を20問に。
- ・学校質問紙調査を原則オンライン回答(Microsoft Formsの活用)
- ・児童生徒質問紙調査項目の一部を変更。

## II 調査結果

### 1 教科調査

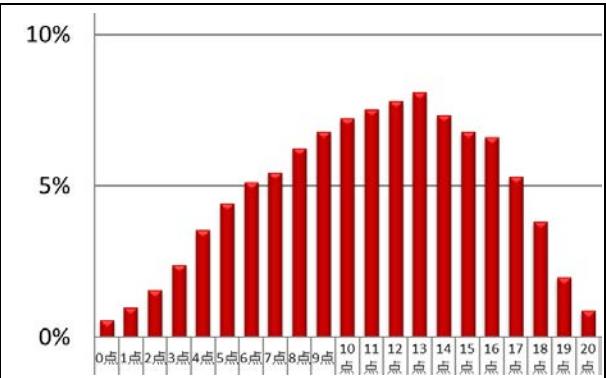
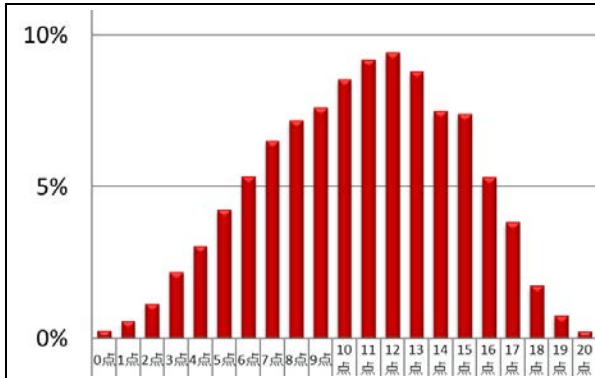
#### (1) 各教科の平均正答率及び中央値

| 小学校 5年 |               |       | 中学校 2年 |              |       |
|--------|---------------|-------|--------|--------------|-------|
| 教科     | 平均正答率 ( )内 R1 | 中央値   | 教科     | 平均正答率( )内 R1 | 中央値   |
| 国語     | 53.4% (60.7)  | 55.0% | 国語     | 62.5% (60.6) | 65.0% |
| 算数     | 55.1% (56.0)  | 55.0% | 数学     | 40.2% (42.9) | 35.0% |

#### (2) 各教科の正答数分布状況 (各教科問題数 20 問)

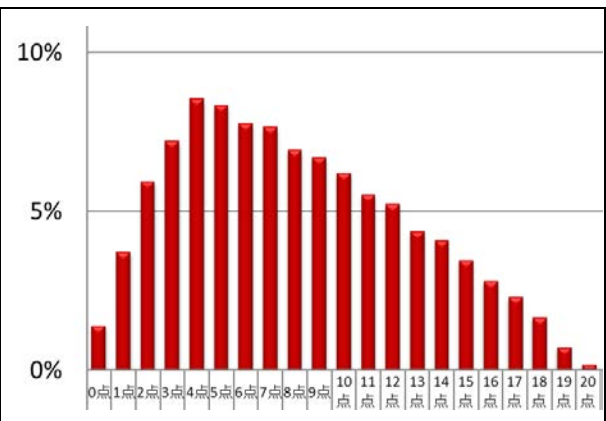
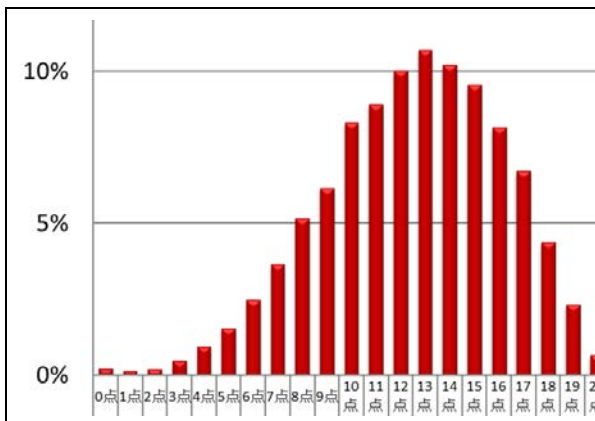
小5【国語】平均正答数 10.7 問 (中央値 11 問)

小5【算数】平均正答数 11.0 問 (中央値 11 問)



中2【国語】平均正答数 12.5 問 (中央値 13 問)

中2【数学】平均正答数 8.0 問 (中央値 7 問)



※各教科の分析については、報告書の中に記載する。

#### (3) 結果分析から見える今年度の主な特徴

教科調査結果の特徴として、次の3点を捉えた。

##### 【小学校】

- ア 正答数5問以下の児童の割合が国語 11.3% (R1 3.0%)、算数 13.3% (R1 7.7%) と増加した。要因として、活用問題の増加、R1 年度正答率が高かった漢字の読み書きや計算問題を削減した影響と考えられる。(R1 国語 25 問→20 問、算数 26 問→20 問)
- イ 経年比較問題のうち、以下に示す問題について、改善傾向が見られる。
  - ・国語「⑮段落相互の関係に着目して読む」 正答率 52% (R1 49%)  
「⑳自分の考えとそれを支える理由との関係を明確にして文章を書く」  
正答率 49% (R1 46%)
  - ・算数「②基準量と小倍数から比較量を求めることができる」  
正答率 74% (R1 61%)
- ウ 国語の記述問題における「無解答率」については、今年度も課題が見られる。

(表1) 小5国語記述問題の無解答率

| 番号 | 調査問題のねらい                      | 正答率  |      | 無解答率 |      |
|----|-------------------------------|------|------|------|------|
|    |                               | R3   | R1   | R3   | R1   |
| 19 | 段落構成を考えながら指定された文章を書く          | 52.4 | 62.3 | 19.2 | 13.0 |
| 20 | 自分の考えとそれを支える理由との関係を明確にして文章を書く | 48.6 | —    | 20.2 | —    |

今回の国語の最後の問題は、解答を文章で書く問題でした。その問題について、どのように解答しましたか。

| 学年   | 年  | 最後まで解答を書こうと努力した。 | 解答しなかったり、解答を書くことを途中であきらめたりした。 | 全く解答しなかった |
|------|----|------------------|-------------------------------|-----------|
| 小学5年 | R2 | R3新設             |                               |           |
|      | R3 | 82               | 12                            | 6         |
| 中学2年 | R2 | R3新設             |                               |           |
|      | R3 | 81               | 12                            | 8         |

左は児童生徒質問紙調査に今年度新設した質問項目である。

文章で書く問題について、途中であきらめたり、全く解答しなかったりする回答が小5と中2で同程度の割合である。小学校段階で書くことについての指導改善が求められる。

【中学校】

(%)

ア 正答数5問以下の生徒の割合が数学34.9% (R1 16.9%) と増加した。問題数の削減(国語25問→20問、数学26問→20問)により、問題文の会話の中から問題解決を図る知識・活用を一体的に問う問題や文章で説明する問題を増やしたことが影響したと考えられる。

イ 経年比較問題のうち、以下に示す問題について、改善傾向が見られる。

- ・国語「④話し手の工夫を理解して聞く」 正答率83% (R1 81%)
- ・数学「①単項式の乗除の計算ができる」 正答率59% (R1 49%)

ウ 数学の記述問題における「無解答率」については、今年度も課題が見られる。

(表2) 中2数学記述問題の無解答率

| 番号 | 調査問題のねらい                          | 正答率  | 無解答率 |
|----|-----------------------------------|------|------|
| 7  | 与えられたグラフから、時間を調べる方法について説明することができる | 41.1 | 26.4 |
| 15 | 問題文に適するための条件が必要な理由を説明することができる     | 34.3 | 37.0 |
| 19 | 不適切だと判断した理由を数学的な表現を用いて説明することができる  | 56.8 | 27.8 |
| 20 | 割合が高くなる理由を相対度数を用いて説明することができる      | 13.1 | 28.8 |

今回の算数(数学)の問題では、解答を言葉や数、式を使って、わけや求め方などを書く(説明する)問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか。

| 学年   | 年  | 全ての書く問題で最後まで書こうと努力した。 | 書く問題で解答しなかったり、解答を書くことを途中であきらめたりしたものがあった | 書く問題は全く解答しなかった |
|------|----|-----------------------|---|----------------|
| 小学5年 | R2 | R3新設                  |   |                |
|      | R3 | 80                    | 18                                      | 2              |
| 中学2年 | R2 | R3新設                  |   |                |
|      | R3 | 53                    | 40                                      | 7              |

左は児童生徒質問紙調査に今年度新設した質問項目である。

中2数学において、言葉や数、式を使って説明することに課題がある。小5から中2への解答の仕方について、努力する生徒の割合が減り、あきらめる生徒が増加していることから、中学校での指導について考えていく必要がある。

(%)

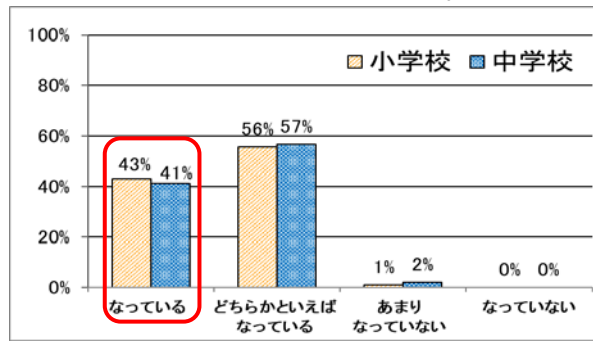
2 学校質問紙調査結果の分析

(1) 「注視する5項目」について

これまで県として推進してきた「諸調査結果を活用した『学校での組織的な対応の一層の強化』」について、「いわて県民計画(2019~2028)」第1期アクションプランに掲げる指標との関連を踏まえ、学校質問紙の中の5つの設問に注目し、分析している。

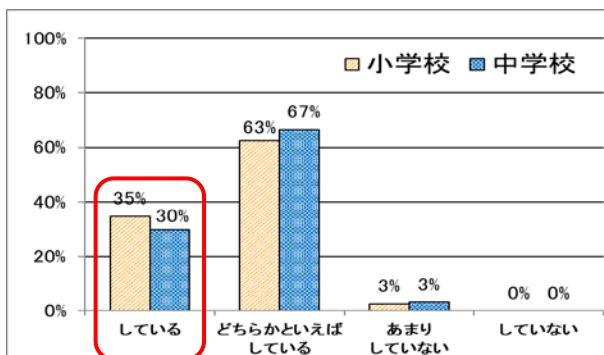
【質問項目 2】

授業で行う振り返りは、児童生徒自身が学習の成果（又は課題）を実感できる振り返りとなっていますか。



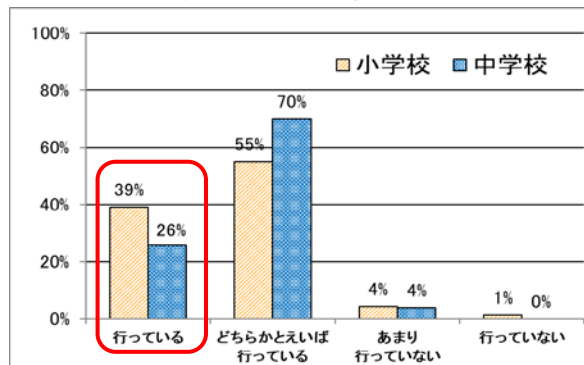
【質問項目 12】

児童生徒が自分で調べたことや考えたことを、分かりやすく文章に書く指導をしていますか。



【質問項目 27】

本年度の全国学調の自校の分析結果から見た児童生徒のつまずきに対応した授業改善を行っていますか。



【質問項目 2】「児童生徒が実感できる振り返り」

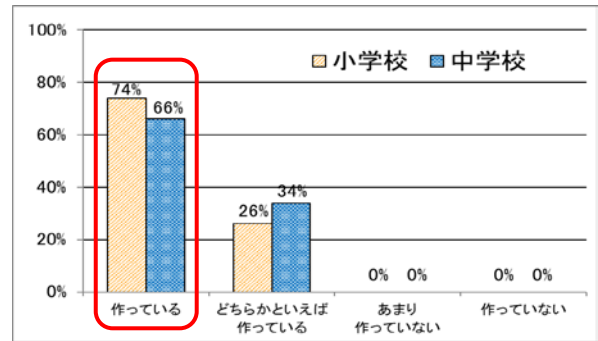
振り返りを行う際は、単に学習感想の記述や知識の確認で留まらず、課題解決のプロセスを振り返ることで、課題を解決することの達成感や学習内容の有用感を得られるようにすることが必要である。

【質問項目 8】「間違いを認める雰囲気作り」

学校質問紙での積極肯定回答の割合（小 74%、中 66%）も高く、肯定回答では小・中学校ともに 100%である。しかし、児童生徒質問紙調査結果では、積極肯定回答が小・中学校ともに 47%であり、さらに「どちらか

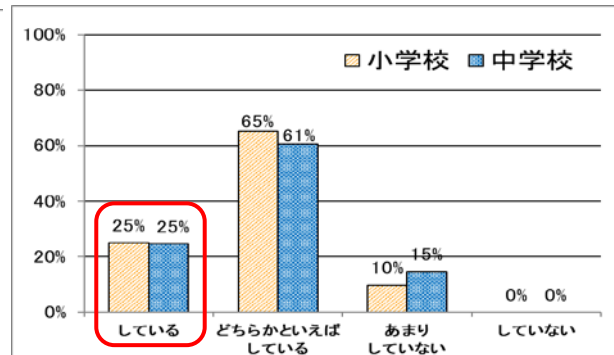
【質問項目 8】

授業を進める際、児童生徒の間違いを認める雰囲気を作っていますか。



【質問項目 16】

学校の宿題などに加え、補充のための学習や発展的な問題に、児童生徒が自ら取り組める工夫をしていますか。



すべての項目において、「している」「行っている」等の各質問項目の1番の回答（「積極肯定」）の割合を注視している。

（質問項目 12・16・27）については、小・中学校ともに積極肯定の割合が低い。

学校全体で組織的に学力向上に取り組むに当たり、本調査の各学校の分析結果については、今後も「積極肯定」に注目していく必要がある。

学級には、授業中の先生からの質問や、教科書の問題の答えなどについて、間違っても認め合える雰囲気がありますか。【児童生徒質問紙24】

| 学年   | 年  | そう思う | どちらかといえばそう思う | どちらかといえばそう思わない | そう思わない |
|------|----|------|--------------|----------------|--------|
| 小学5年 | R3 | 47   | 39           | 10             | 4      |
|      |    | 86   |              | 14             |        |
| 中学2年 | R3 | 47   | 41           | 10             | 3      |
|      |    | 88   |              | 13             |        |

といえばそう思わない」「そう思わない」と回答した児童生徒もいる。このことから指導者側の意識と児童生徒側の意識にズレがあることがわかる。

**【質問項目 12】「調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書く」**

学習の基盤となる言語能力の育成という視点からも、各学校の児童生徒の実態から課題を明らかにし、全教職員で共通理解を図り、どの教科でも「文章で書くこと」に取り組む必要がある。

**【質問項目 16】「家庭学習への取組」**

各学校において、児童生徒一人ひとりに合った学習計画の立て方や内容について、家庭学習の取組を振り返らせ、自己調整したり、次の学習計画に生かす等の指導が考えられる。また、児童生徒に宿題だけでなく、自主学習等に取り組ませ、教員が毎日チェック・コメントし、学習の仕方を指導していくことも必要である。

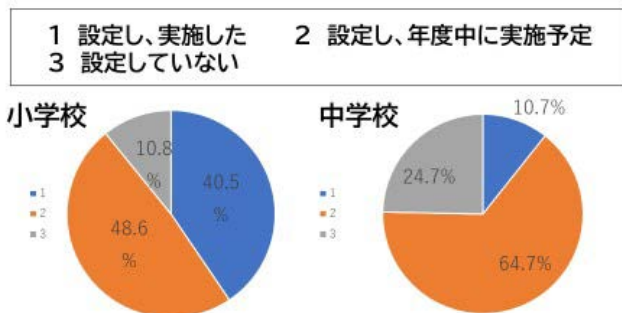
**【質問項目 27】「つまずきに対応した授業改善」**

各種調査結果から児童生徒の実解答（記述）に注目し、一人ひとりのつまずきの要因を把握することが重要である。

さらに、日々の授業で同様のつまずきが予想されることから、児童生徒の発言や記述そのものに着目しながら、つまずいている点を明らかにし、集団全体の理解を深めていくよう改善することが求められる。

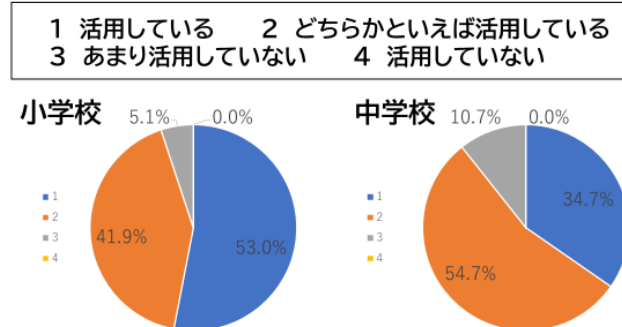
**(2) 授業改善に向けて組織的・重点的に取り組むべき内容について**

**21 過年度の県学調の問題（一部を含む）を全教員で解いて、出題の趣旨を分析し、共通理解する時間を設定しましたか。**



R2(積極肯定) 小 57.6 中 27.2

**26 昨年度に作成した「確かな学力育成プラン」について、年度をまたいで教職員間で共有し、指導改善に活用していますか。**



R2(積極肯定) 小 48.3 中 31.8

H29 年度調査をピークに小中ともに積極肯定が低下している。

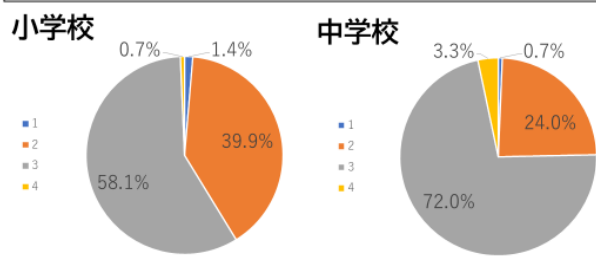
学習指導要領改訂により、身に付けさせたい資質・能力が3つに整理された。調査対象教科・学年だけに指導の改善を求めず、今、どんな力が求められているか、教科や学年を越えて、学校全体で考えていく必要がある。

積極肯定回答は、小・中学校ともに R2 年度より上昇している。

「確かな学力育成プラン」を活用した検証改善サイクルの確立に向けて、全教職員で取り組むことができる検証可能なシンプルな目標を立てることが大切である。その際、学校長のリーダーシップの下で、主任層が要となり、全教職員による学校全体での取組が求められる。

### 31 授業改善に向けて、教員相互の授業参観をどの程度取り組んでいますか。

1 週1回以上    2 月に1回以上    3 学期に1回以上  
4 その他、まだ取り組んでいない



R2(月1回以上)    小 24.8                      中 15.9  
(学期1回以上)    小 20.2                      中 55.6

小中学校ともに「学期に1回以上」の割合が一番多く、R2年度から上昇している。

学力向上に向けて大切なことは、授業を中心とした学校全体での取組である。取組の一つとして、教科を超えて授業を見せ合うことが考えられる。各学校で教科に共通する課題を洗い出し、その課題を解決するための手立てを、授業を見る視点として取り組んでもらいたい。

※「週1回以上」の選択肢は今年度新設

### 3 児童生徒質問紙調査結果の分析

#### (1) 第1期アクションプランに掲げる指標に関する質問について (表3)

| 確かな学力の育成に関連する資料 ※ ( )内の数値はR2年度調査  | R2<br>実績値  | R3<br>実績値  | R3<br>目標値    | 質問紙  |
|---|------------|------------|--------------|------|
| ○児童生徒が自分で調べたことなど適切に表現する指導をしている学校の割合<br>【質問12】児童生徒が自分で調べたことや考えたことを、分かりやすく文章に書く指導をしていますか。   | 小97<br>中95 | 小97<br>中97 | 小100<br>中100 | 学校   |
| ○授業内で学習を振り返っている児童生徒の割合<br>【質問23】授業中の振り返る活動で、学習内容で何が大切だったか、分かったと感じていますか。   | 小90<br>中88 | 小90<br>中88 | 小88<br>中86   | 児童生徒 |
| ○学校の授業がよく分かる児童生徒の割合<br>【質問】授業の内容はよくわかりますか。 ※小4教科、中5教科の肯定回答の平均<br>【小】国89(91)社90(89)算85(87)理93(94)<br>【中】国86(89)社85(87)数74(75)理79(83)英67(73)  | 小90<br>中81 | 小89<br>中78 | 小93<br>中80   | 児童生徒 |
| ○つまずきに対応した授業改善が行われていると感じている児童生徒の割合<br>【質問24】学級には、授業中の先生からの質問や、教科書の問題の答えなどについて、間違っても認め合える雰囲気がありますか。【小】86(86)【中】88(88)<br>【質問25】先生は、授業で分からなかったところや、理解していないことについて分かるまで教えてください。【小】93(92)【中】91(90) ※2つの質問の平均 | 小89<br>中89 | 小90<br>中90 | 小88<br>中91   | 児童生徒 |
| ○弱点を克服するための学習や発展的な学習に取り組んでいる児童生徒の割合<br>【質問10】あなたは、学校の宿題などに加え、弱点を克服する学習に取り組んだり、発展的な問題に取り組んだりしていますか。  | 小67<br>中59 | 小67<br>中58 | 小80<br>中68   | 児童生徒 |

2つの項目で昨年度の実績値を上回った。一方、授業の内容がよくわかる児童生徒の割合が小1ポイント、中3ポイント減少した。また、中学校では5教科で減少している。

#### 学校の授業がよく分かる児童生徒の割合「同一集団経年比較 (H30～R3)」

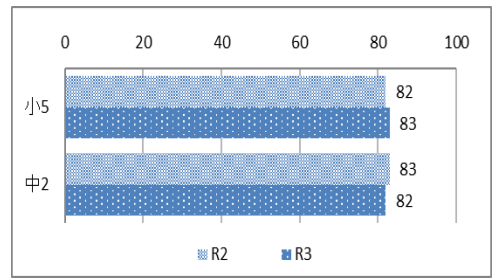
|                 | 国語 | 社会 | 数学(算数) | 理科 | 英語 |
|-----------------|----|----|--------|----|----|
| H30 (小5) 県学調    | 90 | 90 | 87     | 94 | —  |
| R1 (小6) 全国学調    | 88 | —  | 84     | —  | —  |
| R2 (中1) 新入生 ※中止 | —  | —  | —      | —  | —  |
| R3 (中2) 県学調     | 86 | 85 | 74     | 79 | 67 |

#### (2) 授業に関連した項目について

##### 【質問項目 22】

授業中、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいると思いますか。

| 学年   | 年  | 当てはまる | どちらかといえば<br>当てはまる | どちらかといえば<br>当てはまらない | 当てはまらない |
|------|----|-------|-------------------|---------------------|---------|
| 小学5年 | R2 | 34    | 48                | 15                  | 3       |
|      | R3 | 35    | 48                | 13                  | 4       |
| 中学2年 | R2 | 34    | 49                | 14                  | 3       |
|      | R3 | 32    | 50                | 14                  | 4       |
|      |    |       | 82                |                     | 18      |



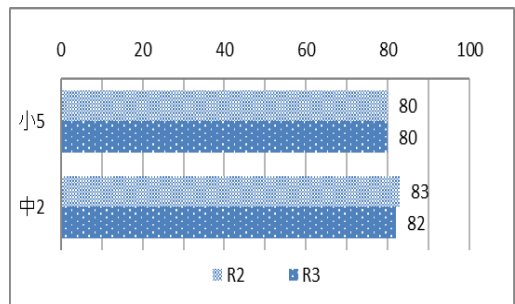
肯定回答の割合は小中学校ともに8割以上であるが、積極肯定回答となると小・中学校ともに3割程度である。この質問項目は、高校生を対象とした調査において、伸びが見られている質問項目であることから、小中高連携という視点からも注目しているところである。どの諸調査にもある質問項目であり、同一集団での経年比較も可能である。

### (3) 授業以外のことに関連した項目について

#### 【質問項目 16】

先生やまわりの人は、あなたのよいところを認めてくれていますか。

| 学年   | 年  | そう思う | どちらかとい<br>えば<br>そう思う | どちらかとい<br>えば<br>そう思わない | そう思わない |
|------|----|------|----------------------|------------------------|--------|
| 小学5年 | R2 | 36   | 44                   | 14                     | 6      |
|      | R3 | 39   | 41                   | 14                     | 6      |
| 中学2年 | R2 | 35   | 48                   | 12                     | 5      |
|      | R3 | 34   | 48                   | 12                     | 6      |
|      |    |      | 82                   |                        | 18     |



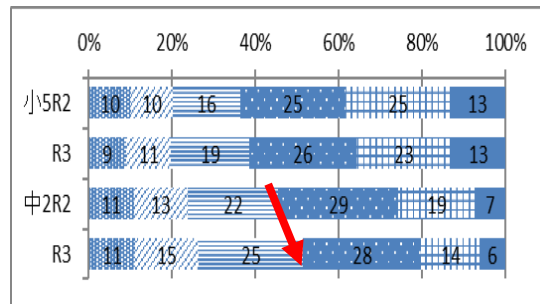
肯定回答の割合は小中学校ともに8割以上であるが、積極肯定回答となると小中学校ともに3～4割程度である。児童生徒が学校生活の様々な場面で、他者から認められる経験を通して、自己の成長を実感できるよう、全ての教育活動において、児童生徒を褒める場を増やしながら、認め、励ます評価を行っていくことが大切である。

### (4) 生活習慣のことに関連した項目について

#### 【質問項目 7】

平日、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンを利用しますか。

| 学年   | 年  | 4時間以上 | 3時間以上<br>4時間より<br>少ない | 2時間以上<br>3時間より<br>少ない | 1時間以上<br>2時間より<br>少ない | 1時間より<br>少ない | 全くしない |
|------|----|-------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|--------------|-------|
| 小学5年 | R2 | 10    | 10                    | 16                    | 25                    | 25           | 13    |
|      | R3 | 9     | 11                    | 19                    | 26                    | 23           | 13    |
| 中学2年 | R2 | 11    | 13                    | 22                    | 29                    | 19           | 7     |
|      | R3 | 11    | 15                    | 25                    | 28                    | 14           | 6     |



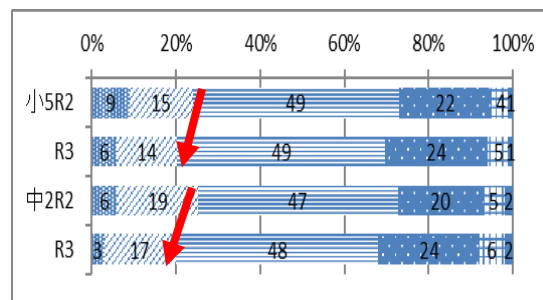
小学校については、昨年度の調査対象学年と大きな差はない。中学校については、2時間以上の使用の割合が51%であり、昨年度より5ポイント増加している。家庭での使用の仕方については、各学校の実態を把握した上で、家庭の協力を得る必要がある。学校報やPTA総会等を活用して、スマホ等の使用の仕方について協力をお願いしていくことも必要である。

### (5) 家庭学習のことに関連した項目について

#### 【質問項目 8】

学校の授業以外で、平日、1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか。

| 学年   | 年  | 3時間以上 | 2時間以上<br>3時間より<br>少ない | 1時間以上<br>2時間より<br>少ない | 30分以上<br>1時間より<br>少ない | 30分より<br>少ない | 全くしない |
|------|----|-------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|--------------|-------|
| 小学5年 | R2 | 9     | 15                    | 49                    | 22                    | 4            | 1     |
|      | R3 | 6     | 14                    | 49                    | 24                    | 5            | 1     |
| 中学2年 | R2 | 6     | 19                    | 47                    | 20                    | 5            | 2     |
|      | R3 | 3     | 17                    | 48                    | 24                    | 6            | 2     |



家庭学習2時間以上の児童生徒の割合は、小・中学校ともに減少している。改善に取り組むべき課題と捉えることができる。児童生徒の学校における学びを確実に定着させるためには、家庭学習の充実が不可欠である。家庭学習の内容はもちろん、取り組ませ方、分量、点検方法についても学校全体で共通理解を図っていく必要がある。

#### 4 調査結果の活用と今後の取組

各機関が連携し、以下の点に取り組んでいくことが必要。

| 取組主体     | 活用及び今後の取組  |
|----------|--|
| 学 校      | 教科調査結果と児童生徒質問紙調査結果の両面から児童生徒の課題を洗い出し、指導の改善に生かすことが必要である。その際、校長のリーダーシップの下で、授業を中心として教科や学年を超えた学校全体での組織的な取組を行う。併せて、児童生徒質問紙調査の分析から、スマートフォンの使い方や生活習慣等についての課題を家庭と共有し、協力を得ながら解決を目指す取組も必要である。また、家庭学習についても、宿題を与えるだけでなく、自ら進んで学習計画や内容を決めて取り組めるように指導することが大切である。   |
| 市町村教育委員会 | 各学校が調査結果から見られた課題等を、今年度中や次年度の指導計画へ確実に反映させ、教育活動全体の改善に積極的に取り組むよう、各学校が作成した「確かな学力育成プラン」に基づいた取組について、より一層の支援が大切である。   |
| 県教育委員会   | <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教科調査結果と質問紙調査結果から分析資料を作成し、各学校での分析の手法として提供していく。</li> <li>○ 各学校における調査結果の分析を活用した「確かな学力育成プラン」を基にした組織的対応の強化について、各種研修会や訪問指導等を通じて、継続的に支援をしていく。</li> <li>○ 分析結果を各学校への個別訪問の際に活用しながら、授業改善に活かし、指導と評価の一体化を一層推進していく。</li> <li>○ 学習の基盤となる資質・能力の1つである言語能力を育成するために、教育課程全体で「話すこと」「書くこと」といった活動を重視することを推進していく。</li> <li>○ 諸調査結果を効果的に活用し、組織的に対応している学校の実践事例の普及に取り組む。</li> </ul> |